



Title	大阪のアクセント（実用的な解説）
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪のアクセント（実用的な解説）

郡 史郎

要旨 大阪のアクセントの全体像を、基本的なことから始めてできるだけわかりやすく説明した。特に、単語が「高く始まる」か「低く始まる」かの区別というもっとも重要な特徴について丁寧に解説した。また、動詞と形容詞の活用形のアクセントや世代差・個人差の問題など、こまかくても実用性という点であった方がよいと思われる情報もあわせてまとめ、関心を持つ一般の方々の役にも立つようにした。

1 大阪弁らしさを感じさせる一大特徴としてのアクセント

日本語で単語ごとに決まっている高さの動き、つまりメロディーのことをアクセントと呼ぶ。メロディーのつけかたには地域による違いがあるが、近畿地方の中部や四国の広い地域で使われている「京阪式アクセント」と言われるものを大阪でも使う。これは「東京式アクセント」や鹿児島などの「二型アクセント」、そして熊本、宮崎、栃木、茨城、山形、宮城などの「無アクセント」とは基本的な性質を異にする。

京阪式アクセント全般についての詳しい解説書はすでにある（とりわけ中井幸比古 2002）。おおまかな解説ならば方言の概説書やインターネット上にたやすく見つけることができる。ただ、そうした解説は種々工夫はされているとは言えかなり専門的で、一般の人にはとっつきにくいものになっている。同時に、実用性という点であるべき情報も少ないと思う。また、京阪式アクセントの地域の内部でも個々の単語のアクセントが違うことがある。

そこで、大阪に特化してそのアクセントの全体像を、基本的なことから始めてできるだけわかりやすく説明し、動詞と形容詞の活用形のアクセントや世代差・個人差のありようなど実用性の点であった方がよいと思われる情報をここにまとめ、研究者にも、また一般の方々にも役に立つようにした。ここでは大阪市の 1965~75 年の生まれの中年層の主流と思われる言いかたを中心に説明する。ひとつひとつの単語の具体的なアクセントについては『大阪アクセント web 辞典』を作成中である（暫定 url は <http://corismus.com/osa/acdosaka.html>）。

大阪弁らしさを形づくる重要な特徴としてのアクセント

大阪で話されることば（大阪弁）は、その伝統的な特徴がすでに 2020 年度の時点の高年層でも薄れはじめており、少し共通語に近づいたものになっている。この傾向は中年層、若者世代にかけてさらに強くなっている。そのため高年層と若者世代ではずいぶんことばが違う。

その中で、アクセントについても高年層と若者世代で違う単語がかなりあるし、本来は東京風のアクセントを大阪風にアレンジした言いかたが若者世代では増えているということはあるが、骨格の部分は以前と変わっていない。だから、特に若者世代では東京的な話しかたに対して大阪らしい話しただと感じさせる一番大きな特徴がアクセントになっていると言ってよいぐらいだ。そういうわけで、大阪のことばというものを知るためにも、またよその地方の人が大阪の話しかたを学ぶ際にもアクセントの知識は欠かせない。

2 高さの書きあらわしかたとアクセントの説明のしかた

書きあらわしかた

単語を発音するときの高さの動きは、どこが音として相対的に高いか、どこが相対的に低いかわらわすことができる。高い箇所を上に線を引くことであらわし、低い箇所を下に線を引くことであらわせば、たとえば大阪市の地名「なんば（難波）」と「天満」、そして動詞の「帰る」と「飼える」の大阪アクセントは次のように書くことができる。

なんば	天満	帰る	飼える
<u>なん</u> ば	て <u>ん</u> ま ¹⁾	か <u>え</u> る	か <u>え</u> る

ただ、これは高さの動きを簡略化して書いたもので、詳しく言うと「飼える」の最初の低い「かえ」の部分はまっ平らではなく「え」の方がわずかに高いことが多い。これは単語の冒頭での低音連続の場合だ。「なんば」の「んば」も低い音が続くが、こちらは2つめの「ば」の方がさらに少し低いのが普通だ。しかし同じ高さで言ってもかまわない。これは高い音の後の低音連続の場合の話だ。そして「飼える」の「る」は「帰る」の「る」ほど高くなくてよい。

また、上はひとつの単語の中で相対的に高いか低いかなだけを2段階で書いたものだが、会話の中ではその前後の単語との関係で「なんば」なら なんば、なんば、なんば、なんば のような形でも使われる。「なんば」のアクセントとして重要なのは「な」から「んば」にかけてははっきりわかるように下がるということなのだが、その動きは今の例のように会話の中でいつも保たれることに注意してほしい。

インターネットではアクセントを↘と↗という矢印で書きあらわそうとする試みを見かける。矢印を使うのはよいのだが、4節で説明するように、大阪のアクセントを決めるのは単語が高く始まるか低く始まるかということと、下がり目があるならそれはどこか、つまりどこから低くなるかということなので、下向きの↓を低い箇所の前に、上向きの↑を高い箇所の前につけるのがよい。↗は疑問文の最後などのゆっくりめの上昇を示すためにとっておきたい。つまり次のようにするとうまく書きあらわすことができる。下の段は同じ高さが続くところは矢印を省略したもので、これでも十分だ。ただし、以下では感覚的にわかりやすい上線と下線を使う。

なんば	天満	帰る	飼える
↑な↓ん↓ば	↓て↑ん↓ま	↑か↑え↑る	↓か↓え↑る
または ↑な↓んば	↓て↑ん↓ま	↑かえる	↓かえ↑る

アクセントの説明のしかた

ところで、「天満」は「『ん』にアクセントがある」という言いかたをする人がいる。これはあまりよくない。「『ん』が高い」のように言う方がよいし、またわかりやすい。たとえ

1) てんま と言う人もいる。

ば「休み」という単語のアクセントは人によっていくつかあるのだが、これを やすみ と言う人のアクセントは「『す』が高い」と説明すればよく、古めの言いかただがこれを やすみ とする人のアクセントは「『やす』が高い」が高いと説明すればよい。「『す』にアクセントがある」という言いかただけではこのどちらかわからない。「帰る」なら「単語全体が高い」。

ただ、面倒だが正確には「帰る」のアクセントは「高く始まって下がり目がない」，「飼える」のアクセントは「低く始まって下がり目がない」，やすみ は「高く始まって『す』の後で下がる」のように言うのがふさわしいことは4節で説明する。

なお、同じことを学会でかなり広く受け入れられている専門用語を使って言えば「帰る」のアクセントは「高起式無核」，「飼える」のアクセントは「低起式無核」となる。下がり目のことを「核」と呼ぶので「無核」とは下がり目がないことだ。先述の中井(2002)で使われている書きかたなら「なんば」は1，「天満」はL2，「帰る」は0，「飼える」はL0，「休み」を やすみ とする場合L2，やすみ なら単に2になる。これは下がり目の場所が何音節目（専門用語では“何拍目”）の後かを数字で記し（下がり目がなければ0），最初が低く始まる場合にだけLをつけたもので、京阪式アクセントのしくみを理解していれば非常にわかりやすい。

高い低いのが感覚がわからない人のために

ところで、そもそも音が高いとか低いとかいう感覚がよくわからないと言う人もいるだろう。そういう人にお勧めしたいのは歌のメロディーを通して高さの感覚をつかむことだ。ここでは、知っている人が多いと思う「蛍の光」の出だしの部分で説明しよう。

歌の最初の「ほたーるの」のメロディーは「ほ」が低く、「たーるの」が高い。つまり ほたーるの だ。そして次の「ひかーり」の「ひ」は高い（正確には「蛍の」の最後の「の」よりも一段高いが）。そして「か」で下がる。だから ひか だ。歌の方はこの後「ーり」でさらに一段下がるのだが、それはよいとして、「ほーたるの」と「ひか」の部分だけを実際に声に出して何度も歌っているうちに高い低いの感覚をつかんでいただけたらと思う。

3 アクセントとイントネーションの違い

ここまで例として見てきた「なんば」「天満」「帰る」「飼える」「休み」の高さの動きのような単語ごとにきまっているメロディーのことを一般には「イントネーション」と呼ぶことが多い。だがこれは「アクセント」と呼ぶ方がよい。それは専門用語としてということではない。というのは、たとえば野球とサッカーは誰でも違うものだと思っているだろう。ボールを使うスポーツだからと言ってサッカーのことを野球と呼ぶのはおかしい。「アクセント」と「イントネーション」はどちらも音の高さを使うが、両者には野球とサッカーぐらいの違いがある。専門用語としてでなくても言い分けるのは当然のことなのだ。

一般論として、英語なども含めてアクセントとはもともと単語ごとにきまっている高さ、強さ、長さ、またそれに伴う音色の違いなどの特徴のことを言う。大阪弁も含めて日本語の場合

はそれが高さの動きだ。強さや長さではない。また、英語などと同じくアクセントは規則で決まる部分もありはするが、基本的には単語ごとにいちいち覚えなないといけないものだ。だから、「帰る」と「飼える」、「橋」と「箸」「端」のようにアクセントが違うだけで別の単語になることがよくある。また、日本語の場合、ひとつひとつの単語のアクセントは大阪とたとえば東京ではかなり違う。

これに対して、イントネーションとは、同じ単語でもそれを文の中でどういう意味あいと言うかで変わる高さの動きのことだ。これは意味の規則でだいたい決まるもので(郡 2020)，その規則は大阪でも東京でもほぼ同じだ。そして、いちいち覚えなくてもたいていの人は感覚的にわかっているものだ。たとえばバスが「来た。」と言い切るとき、それはひとつの文だが、そのメロディーは大阪でも東京でも きた、つまり「た」は低く言うだけで、高くはしない。だが、「来た？」と聞くときは「た」を徐々に高くしながら言うので きた↗ となる。この↗の印で書いた最後の上昇(疑問型上昇調)は疑問の意味をあらわす「文末のイントネーション」だ。また、きたのように最後に高く強い「あ」の音をつけくわえる感じで言うと(強調型上昇調)，それは「来たんだぞ」と主張する言いかたになる。どういうふうにするかがひととおりでないこと、そしてそれによってニュアンスが変わる点もイントネーションの特徴だ。

また「大きなイチゴの写真」は、写真が大きいのかイチゴが大きいのかによって「イチゴ」の部分のメロディーが微妙に違う。写真が大きい場合は大阪では おーきな いちごの しゃしん だが、イチゴが大きい場合は おーきな いちごの しゃしん、つまり、「ち」の高さを抑えて言わないといけない。これは「大きな」と「イチゴ」の意味の関係で決まる「文内のイントネーション」だ。これについては低くも高くもない中ぐらいの高さや、普通より一段高い高さも重要になる。

4 大阪アクセントのしくみ

さて、大阪ではひとつひとつの単語のアクセントは、①高く始まるか低く始まるかということと、②音の下がり目があるならそれはどこかという2点で決まる。

なかでも、単語が高く始まるか低く始まるかの違いがある点が大阪アクセントのいちばん大きな特徴になる。たとえば、「帰る」の意味の かえる は高く始まるアクセント(これを高起式と言う)で、「飼える」の意味の かえる は低く始まるアクセント(低起式)だ。こういう区別は東京式のアクセントにはない。だから、東京式にくらべてアクセントの種類が多い。

大阪と東京のアクセントの違い

大阪と東京ではアクセントが逆だと言う人がいる。だが、それは俗説だ。たしかに「雨」は大阪では あめ で東京では あめ だ。そして「橋」は大阪では はし で東京では はし、「箸」大阪では はし (以前は最後に下がり目のない はし) で東京では はし だ。つまり高い場所が逆だ。そういう例だけを出されるといかにもすべて逆のような気がしてしまう。

だが、「端」は大阪では はし で東京では はし だし、「飴」は大阪では あめ で東京では あめ なので最初が違うだけだ。「去年」「奈良」「もみじ」「由美」「見た」だと、大阪でも東京でも きよねん、なら、もみじ、ゆみ、みた。だから「去年奈良でもみじを由美と見た」という文なら、アクセントは大阪と東京ですべて同じ²⁾。だから、正しくは大阪と東京で逆のアクセントもあるということだ。ただ、2音節語に限れば逆のものは少なくないとは言える³⁾。

大阪のアクセントの種類

2節で例として見た3音節（3拍）の単語のアクセントの種類を具体例とともにまとめると次の表1のようになる。

「さっき」のように最後に下がり目があるアクセントには記号として「ゝ」の印をつけた。これは文の中でたとえば助詞の「は」を続けて言うと さっきゝ となるという意味だ⁴⁾。ここではアクセントを記す際には助詞の「は」「を」「へ」は発音どおり わ、お、え と書く。「大阪」「迷惑」のように長い母音がある単語についても普通の発音どおり おーさか、めーわく と書いたものにアクセントの印をつける。

表1 3音節の単語のアクセントの種類（名詞以外も含む）

	高く始まる型	低く始まる型
1音節目の後で下がる型 (最初だけが高い)	<u>なんば</u> (なんば) <u>こころ</u> (心) <u>あかい</u> (赤い)	
2音節目の後で下がる型	<u>つかれ</u> (疲れ) <u>つとめ</u> (勤め)	<u>てんま</u> (天満) <u>いちご</u> (イチゴ)
3音節目の後で下がる型 (次にかけて下がることを示すために「ゝ」の印をつける)		<u>さっき</u> ゝ <u>まっち</u> ゝ (マッチ)
下がり目がない型	<u>さかな</u> (魚) <u>ひつじ</u> (羊) <u>かえる</u> (帰る)	<u>ねずみ</u> (ネズミ) <u>からす</u> (カラス) <u>かえる</u> (飼える)

2) ただし、きわめてこまかい高さの動きの点などでの違いはあるので、文全体の発音を聞いたときに地元の人間の半数程度は大阪人が発音したものか東京人の発音かを聞き分けることができる（郡 2004）。

3) 全体で1万語レベルの単語を考えると、2音節の約千語のうち4割弱が該当。

4) ただし、この単語は「さっき帰ったばかり」「さっき食べたばかり」のように動詞を修飾する意味で言うときは さっき かえったばかり、さっき たべたばかり になる。これは副詞として使うときは下がり目がない型のアクセントになるということだ。このほか「3つ (みっつ)」「1年 (いちねん)」など数を含む単語は一般に名詞としてのアクセント以外に、副詞として下がり目のないアクセントでも言える。

5 品詞ごとのアクセントの特徴

アクセントの性質は品詞、特に名詞か動詞か形容詞かによって大きく変わる。

5.1 名詞のアクセント

名詞の場合はさまざまなアクセントがある。その中でどういうアクセントが多いかという割合は音節数によって違う。

1 音節の名詞 (表2 参照) 1 音節の名詞、特に日常身近な単語は長めに伸ばして言うことが多いが、アクセントとしては「蚊」(か^ー、伸ばさない場合は か)のように高く始まって下がらないアクセントが多い。現在よく使う1万語レベルの単語(人名・地名のぞく)のうちの1音節名詞で言えば、大阪市の1965~75年の生まれの主流と思われる言いかたではこのアクセントが約60%を占める。このタイプの単語にはほかに「柄」^え「蛾」^こ「気」^き「具」^こ「子」^こ「血」^こ「戸」^と「実」^み、そして「ん」以外のかな文字がある。また、「匂」^え「差」^さ「市」^し「詩」^し「図」^ず「碑」^ひ「美」^み「間」^ま「無」^むのような少し硬めの単語にもこのアクセントは多い。

「絵」(え^ー、伸ばさない場合は え)のように低く始まって下がらないものは約30%。このタイプのものにはほかに「木」^き「字」^じ「酢」^そ「手」^て「根」^ね「火」^か「屁」^ぺ「目」^め「芽」^めがある。

「毛」(け^ー、伸ばさない場合は け)のように高く始まって下がるものは少ないが、ほかに「葉」^え「歯・刃」^は「日」^に、そしてかな文字の「ん」がある。

なお、硬めの単語を長く伸ばして言わない傾向は若い世代ほど顕著なようだ。

表2 1音節の名詞のアクセントの種類

	高く始まる型	低く始まる型
下がる型	け ^ー ・け (毛)	
下がらない型	か ^ー ・か (蚊)	え ^ー ・え (絵)

2 音節の名詞 (表3 参照) 2 音節の名詞では、「山」「川」のように最初だけが低いアクセントが過半数を占める(1万語レベルで約55%)。このタイプにはほかにたとえば「愛」「足」「家(いえ・うち)」「石」「犬」「芋」「歌」「餌」「奥」「音」「紙」「塩」「貝」「靴」「シャツ」「月」「夏」「波」「花」「冬」「雪」がある。そして、高く始まって下がり目がないタイプが約25%ある。この仲間は「飴」「牛」「風」「皿」「城」「竹」「丸」「嫁」など。

低く始まって単語の最後に下がり目があるアクセントは約20%。ただし、このタイプのうち、「雨」は昔も今もこのアクセントだった。この仲間には「春」「秋」「朝」などがある(約10%)。ところが、「船」はおおむね1960年代前半までの生まれの世代では、低く始まって最後に下がり目がないアクセントだった。この仲間には「海」「空」「肩」などがある(約10%)。それがそれ以降の世代では最後に下がり目がないものになり、「雨」のタイプとの違いがなくなってしまった。このことは11節の世代差の項目であらためて説明する。

表3 2音節の名詞のアクセントの種類

	高く始まる型	低く始まる型
1音節目の後で下がる型 (最初だけが高い)	や <u>ま</u> (山) か <u>わ</u> (川)	
2音節目の後で下がる型		<u>あ</u> め (雨) <u>ふ</u> ね (船) 下がり目がない <u>ふ</u> ね は古め
下がり目がない型	<u>に</u> わ (庭) <u>と</u> り (鳥)	<u>な</u> に (何) <u>ぼ</u> く (僕)

伝統的に下がり目がないアクセントが例外的に 1960 年代後半以降生まれの世代に残ったものに「何」と「僕」がある。ただ、これもいつまで残るかわからない。2010 年の時点では「いつ」は若者世代でも安定的に下がり目がないアクセントだったし、「お茶」「お湯」のように「お」がつくものはもこのアクセントで言う若者が多かったが、今はその世代の人たちも下がり目をつけて言い始めている。

2音節名詞の残り約 20%が「庭」「鳥」のように高く始まって下がり目がないアクセントになる。仲間に「飴」「牛」「エビ」「顔」「風」「口」「皿」「下」「右」「鼻」「水」など。

3音節の名詞 (表1 参照) 3音節の名詞はたくさんあるが、多いのは「なんば」「心」のように最初が高いアクセントか (約 40%) , 「ネズミ」「カラス」など低く始まって下がり目がないアクセントだ (約 35%)。それに続くのが「魚」「羊」のように高く始まって下がり目がないアクセント (約 25%) と, 「天満」「苺」のように低く始まって2音節目の後で下がるアクセント (約 15%)。「天満」「苺」のタイプは全体としては少ないが, 「ユニバ」「マクド」「ミスド」のような施設名やショップ名等の最近の略称はこのアクセントで言うことが多い。

その他のアクセントはごく少ないし, しかもどんどん減ってきてる。表1にあげた単語は古いアクセントが比較的に残っているもの。「疲れ」「勤め」のように高く始まって2音節目の後で下がるタイプは, かなり古めの言いかたでは「頭」「男」「^{おもて}表」「女」「鏡」「水着」などもう少し多かった。だが, それらは今は低く始まって2音節目の後で下がるアクセントか最初だけが高いアクセント, 「水着」など単語によってはそれに加えて高く始まって下がり目がないアクセント (これは東京アクセントをとりいれた可能性がある) のどれかに大阪市ではだいたいなっている。「水着」の場合は今 みずぎ, みずぎ, みずぎ の3つの言いかたが聞かれる。また, 単語によっては若者世代でも古い言いかたを残す人がいる。

「さっき」のように低く始まって3音節目だけを高くしその後で下がるものはもともとごく少なかった。しかも, ほかは「マッチ」「ぎゅちょ」「出っ歯」のような今あまり使わない単語だ。単語自体は使う人でも, アクセントは「ネズミ」などと同じく, 低く始まって下がり目がないタイプか, 東京式と同じく最初だけが高いアクセントで言うことが今は増えている。

表4 4音節の名詞のアクセントの種類

	高く始まる型	低く始まる型
1音節目の後で下がる型 (最初だけが低い)	あい <u>さ</u> つ (挨拶) せん <u>せ</u> ー (先生)	
2音節目の後で下がる型	はな <u>み</u> ず (鼻水) ろく <u>じゅ</u> ー (60)	おん <u>が</u> く (音楽) めー <u>わ</u> く (迷惑)
3音節目の後で下がる型	かみ <u>な</u> り (雷) かん <u>が</u> え (考え)	たま <u>ね</u> ぎ (タマネギ) の <u>こ</u> ぎり (のこぎり)
下がり目がない型	おー <u>さ</u> か (大阪) とも <u>だ</u> ち (友達)	が <u>っ</u> こー (学校) わ <u>か</u> もの (若者)

4音節以上の名詞 (表4 参照) 4音節の名詞もたくさんある(1万語レベルの単語のうち、3・4音節名詞あわせると約6千)。その中で「大阪」「友達」のような高く始まって下がり目がないアクセントが多い(約60%)。「学校」「若者」のように低く始まって下がり目がないもの、「音楽」「迷惑」のように低く始まって2音節目の後で下がるもの、「挨拶」「先生」のように最初だけが低いものはいずれも10~15%。それ以外のアクセントは少ない。

5音節以上の名詞は複合語が多い。それらはこの後で説明する規則にしたがう。

漢語のアクセント

昔の中国のことばに由来する「天下」「制度」「才能」「外国」や音読みの漢字を使って日本で作られた「進化」「郵便」「野球」のような漢語が日本語にはたくさんある。そのアクセントは大阪では てんか、せーど、さいのー、がいこく、しんか、ゆーびん、やきゅー で、下がり目は東京式と同じになるものが多い。ただし、表4の「音楽」「迷惑」など例外もある。

複合語のアクセントの原則と例外

「美術(びじゅつ)」のように高く始まる単語の後に「教室(きょーしつ)」という単語を続けて「美術教室」というひとつの複合語にすると、アクセントは びじゅつきょーしつ になる。「学校(がっこー)」を続けて「美術学校」にすると、びじゅつがっこー だ。そして「音楽(おんがく)」のように低く始まる単語に「教室」「学校」を続けた「音楽教室」と「音楽学校」は おんがくきょーしつ、おんがくがっこー になる。このように、高く始まるか低く始まるかという性質は、その後に別の単語を続けて作る複合語でも生かされるという原則がある。そして、複合語の前半のもとの下がり目はなくなって平らになり、複合語の後半は最初だけを高くする言いかたになる。

今あげた例はすべて漢語だが、そうでなくても「女(おんな, 古くは おんな)」と「友達(ともだち)」で「女友達(おんなともだち)」、「ミルク(みるく)」と「キャラメル(きやらめる)」で「ミルクキャラメル(みるくきやらめる)」。

ただ、この原則には例外がいくつかある。まず「音楽グループ（おんがくぐるーぶ）」の「グループ（ぐるーぶ）」のように、後半がもともと2音節目以降に下がり目がある場合は、その下がり目の場所を生かして言う。

また、「美術教室」のように本来前半が高く始まるものでも、複合語ではそれを低く始まる形に変えて びじゅつきょーしつ と言う人がいる。

「世界新記録」のように3つの要素を組み合わせた長い複合語は、「世界（せかい）」と「新記録（しんきろく）」のように2つにわけて、後半の高さを抑えながらもそれぞれのアクセントを生かして続けることが多いので せかいしんきろく。「取扱説明書」は「取扱（とりあつかい）」と「説明書（せつめーしょ）」を続けて とりあつかいせつめーしょ⁵⁾。

そして、後半が1・2音節という短い場合も先の原則はあてはまらない。アクセントは単語しだいになるが、前半が3音節以上で後半が漢語で1字のものは、後半が低くつく言いかたか、前半のアクセントを生かす形でつく言いかたかのほぼどちらかになる。後半が「案」「駅」「学」「額」「館」「感」「業」「剤」「市」「人」「税」「物」「量」「料」「力」などの場合は低くつくので、たとえば「計画案（けーかくあん）」「大阪駅（おーさかえき）」「中国人（ちゅーごくじん）」「印刷物（いんさつぶつ）」「仕事量（しごとりょー）」になる。漢語ではないが「出発日（しゅっぱつび）」のような「日」も同じ。一方、後半が「家」「語」「性」「製」「中」「的」「弁」などは前半のアクセントを生かす形でつくので、たとえば「評論家（ひょーろんか）」「中国語（ちゅーごくご）」「関連性（かんれんせー）」「処理中（しよりちゅー）」「比較的（ひかくてき）」「大阪弁（おーさかべん、古くは おーさかべん）」などになる。

以上とは別のタイプの例外として、「音楽開始（おんがくかいし）」の「開始（かいし）」や「音楽中断（おんがくちゅうだん）」の「中断（ちゅーだん）」のように、後半が動作や状態をあらわす単語の場合は元のアクセントを続けて言う。ただし、後半の高さは抑える。

この仲間には「谷町九丁目（たにまちきゅーちよーめ）」のように後半が前半の指示内容を限定するタイプのもの、「田中会長（たなかかいちよー）」「商都大阪（しよーとおーさか）」のように一方が他方を補足するタイプのもの、そして「喜連瓜破（きれうりわり：駅名）」のように同じ種類のもの並べてひとつにまとめるタイプのものがある。

接頭辞をつける名詞のアクセント

「旧」「新」「非」「不」「未」「無」をつけることばは低く始まる複合語のアクセントになる。たとえば「旧料金（きゅーりょーきん）」「新発売（しんはつばい）」「非常識（ひじょしき）」「不自然（ふしぜん）」「未確認（みかくにん）」「無関係（むかんけい）」。

「大」「再」「小」「大」をつけることばは高く始まる複合語のアクセントになる。たとえば「大にぎわい（おーにぎわい）」「再放送（さいほーそー）」「小休止（しよーきゅーし）」「大混乱（だいてんらん）」。

5) 長い複合語のアクセントを作る原理自体は東京のものと同じ。詳しくは郡(2016) 参照。

丁寧の「お」をつけることは低く始まるが、下がり目はさまざまで、「お遊び（おあそび）」「お体（おからだ）」「お洗濯（おせんたく）」のように複合語としてのアクセントになるものと、「お買い物（おかいもの）」「お祭り（おまつり）」のように全体が低く始まって下がり目のないアクセントになるもの、「お名前（おなまえ）」「お弁当（おべんと）」のタイプ、そして「お食事（おしょくじ、おしょくじ）」「お気の毒（おきのどく、おきのどく）」のように、下がり目のない言いかたと、もとの下がり目を生かした言いかたの2つがあるものがある。

5.2 名詞につける助詞などのアクセント

助詞の「が」「を」「に」「で」「は」、そして並べて言う「と」は名詞のアクセントを生かす形でそのままつけばよい（このつきかたを順接と言う）。だから「なんばは」なら なんば ね、「魚が」なら さかな が となり、「ネズミ」など低く始まって下がり目のないタイプにつけるときは ねずみ お となる。「の」も基本は同じだが、7節で説明する特殊な規則がある。

助詞でも「も」と「へ」は低い音でつける（低接）。「魚も」「大阪へ」なら さかな も、お さか え、「ネズミも」なら ねずみ も と言う。「なんばへ」なら なんば え と低いまま。

「かも」「ぐらい」「しか」「でも」「ほど」「まで」など2音節以上の助詞のつきかたはさまざまで、しかもなかなか複雑なので『大阪アクセント web 辞典』を参照してほしい。

文の最後につける共通語の「だ」「だった」「だろう」も、またそれにあたる大阪弁の「や」「やった」「やろ」も低い音でつけるので さかな だ、さかな だ った、さかな や、さかな や った、さかな や ろ、ねずみ だ、ねずみ だ った、ねずみ や、ねずみ や った、ねずみ や ろ など。

「です」は名詞のアクセントを生かす形でつけて さかな です、ねずみ です だが、「でした」は「で」の後で下げて さかな で した、ねずみ で した。「でしょ」は全体を低くつけるので さかな で しょ、ねずみ で しょ。「だったでしょ」は さかな だ った で しょ、さかな や った で しょ、ねずみ だ った で しょ、ねずみ や った で しょ だが、「た」の部分は少し高くしてもよい。

「みたいな（み たい な）」と「らしい（ら し い）」は さかな み たい な、ねずみ み たい な、さかな ら し い、ねずみ ら し い のように、名詞のアクセントを生かした後で下げる形でつく。

5.3 動詞のアクセント

動詞の基本の形（終止形）は、高く始まって下がり目がないか、低く始まって下がり目がないかのどちらかだけだ。お る（居る）は唯一の例外。このうち、高く始まるものが約3対1の割合で低く始まるものより多い。どちらを使うかに世代差があるものはごく少ないし（全体で1万語レベルの中の約1割の動詞のうち約2%）、個人差も少なく、間違いにも敏感だ。だから、動詞の場合は高く始まるか低く始まるかを言い分けることが非常に大事になる。

表4-1と表4-2に五段活用と一段活用の2音節と3音節の動詞1例ずつと変格活用の動詞について主な活用形（中年層でよく使う助動詞をつけた形）のアクセントをまとめた。表4-1は高く始まる動詞の例で、表4-2は低く始まる動詞の例になる。

表 4-1 動詞の活用形のアクセント（高く始まる動詞）

	行く（いく）	頼む（たのむ）	着る（きる）	やめる（やめる）	する（する）
否定	い <u>か</u> ない	たの <u>ま</u> ない	き <u>な</u> い	やめ <u>な</u> い	し <u>な</u> い
	い <u>か</u> な <u>か</u> った	たの <u>ま</u> な <u>か</u> った	き <u>な</u> な <u>か</u> った	やめ <u>な</u> な <u>か</u> った	し <u>な</u> な <u>か</u> った
	い <u>か</u> ん	たの <u>ま</u> ん	き <u>ん</u>	やめ <u>ん</u>	せ <u>ん</u>
* 大阪市内の中年層 ではこちらが多い	い <u>け</u> へ <u>ん</u> い <u>か</u> へ <u>ん</u> *	たの <u>め</u> へ <u>ん</u> たの <u>ま</u> へ <u>ん</u> *	き <u>ー</u> （け <u>ー</u> ） <u>へ</u> ん き <u>ー</u> ひ <u>ん</u> *	や <u>め</u> へ <u>ん</u>	せ <u>ー</u> へ <u>ん</u>
丁寧	いき <u>ま</u> す	たの <u>み</u> ま <u>す</u>	き <u>ま</u> す	やめ <u>ま</u> す	し <u>ま</u> す
	いき <u>ま</u> し <u>た</u>	たの <u>み</u> ま <u>し</u> た	き <u>ま</u> し <u>た</u>	やめ <u>ま</u> し <u>た</u>	し <u>ま</u> し <u>た</u>
雑に扱わない 「…はる」 （軽い敬意）	いき <u>は</u> る	たの <u>み</u> は <u>る</u>	き <u>は</u> る	やめ <u>は</u> る	し <u>は</u> る
	いき <u>は</u> っ <u>た</u>	たの <u>み</u> は <u>っ</u> た	き <u>は</u> っ <u>た</u>	やめ <u>は</u> っ <u>た</u>	し <u>は</u> っ <u>た</u>
雑に扱う 「…よる」	いき <u>よ</u> る	たの <u>み</u> よ <u>る</u>	き <u>よ</u> る	やめ <u>よ</u> る	し <u>よ</u> る
	いき <u>よ</u> っ <u>た</u>	たの <u>み</u> よ <u>っ</u> た	き <u>よ</u> っ <u>た</u>	やめ <u>よ</u> っ <u>た</u>	し <u>よ</u> っ <u>た</u>
ソフトな命令	いき	たの <u>み</u>	き <u>ー</u>	やめ	し <u>ー</u>
過去	い <u>っ</u> た	たの <u>ん</u> だ	き <u>た</u>	やめ <u>た</u>	し <u>た</u>
仮定の「…たら」	い <u>っ</u> た <u>ら</u>	たの <u>ん</u> だ <u>ら</u>	き <u>た</u> ら	やめ <u>た</u> ら	し <u>た</u> ら
依頼・「…してくる」	い <u>っ</u> て	たの <u>ん</u> で	き <u>て</u>	やめ <u>て</u>	し <u>て</u>
…して、そして	い <u>っ</u> て	たの <u>ん</u> で	き <u>て</u>	やめ <u>て</u>	し <u>て</u>
進行	い <u>っ</u> て <u>る</u>	たの <u>ん</u> で <u>る</u>	き <u>て</u> る	やめ <u>て</u> る	し <u>て</u> る
	い <u>っ</u> て <u>た</u>	たの <u>ん</u> で <u>た</u>	き <u>て</u> た	やめ <u>て</u> た	し <u>て</u> た
…する人	いく <u>ひ</u> と	たのむ <u>ひ</u> と	きる <u>ひ</u> と	やめる <u>ひ</u> と	する <u>ひ</u> と
仮定の「…ば」	い <u>け</u> ば	たの <u>め</u> ば	き <u>れ</u> ば	やめ <u>れ</u> ば	す <u>れ</u> ば
強い命令	い <u>け</u>	たの <u>め</u> ・たの <u>め</u>	き <u>ー</u>	や <u>め</u>	せ <u>ー</u>
誘い・決意	い <u>こ</u>	たの <u>も</u>	き <u>よ</u>	やめ <u>よ</u>	し <u>よ</u> ・し <u>ょー</u>

表 4 にないタイプの動詞として、「挨拶する」「迷惑する」「同情する」のような「する」がつくものは、「挨拶（あいさつ）」「迷惑（めーわく）」「同情（どーじょー）」のアクセントを生かして、あいさつする、めーわくする、どーじょーする。また、「間に合う」のような単語連続から来た動詞は、本来は まにあう だが、今はひとつの動詞として まにあう が多い。

5.4 形容詞のアクセント

「長い」「うれしい」「おもしろい」のように最後が「い」で終わる形容詞は、3 音節以上のものなら高く始まって最後の 2 音節が低いのが特徴⁶⁾。だから ながい、うれしー、おもしろい となる。2 音節の「良い」「いい」は よい、いー あるいは えー、「ない」は ない、「濃い」は こい、「かい（痒い）」は かい。活用形の一覧を表 5 にまとめる。

6) かつては最後の 1 音節だけが低い形容詞もあった。それが泉南地域には おもしろい（おもしろい）のように今も一部残っている。

表4-2 動詞の活用形のアクセント（低く始まる動詞）

	飲む（のむ）	歩く（あるく）	見る（みる）	食べる（たべる）	来る（くる）
否定	のまない	あるかない	みない	たべない	こない
	のまなかった	あるかなかった	みなかった	たべなかった	こなかった
	のまん	あるかん	みん・みん	たべん	こん
	のめへん	あるけへん	めーへん	たべへん	けーへん
	のまへん*	あるかへん*	みーひん*		こーへん*
丁寧	のみます	あるきます	みます	たべます	きます
	のみました	あるきました	みました	たべました	きました
雑に扱わない 「…はる」 （軽い敬意）	のみはる	あるきはる	みはる	たべはる	きはる
	のみはった	あるきはった	みはった	たべはった	きはった
雑に扱う 「…よる」	のみよる	あるぎよる	みよる	たべよる	ぎよる
	のみよった	あるぎよった	みよった	たべよった	ぎよった
ソフトな命令	のみ	あるぎ	みー	たべ	きー
過去	のんだ	あるいた	みた	たべた	きた
仮定の「…たら」	のんだら	あるいたら	みたら	たべたら	きたら
依頼・「…してくる」	のんで	あるいて	みて	たべて	きて
…して、そして	のんで	あるいて	みて	たべて	きて
進行	のんでる	あるいてる	みてる	たべてる	きてる
	のんでた	あるいてた	みてた	たべてた	きてた
…する人	のむ ひと	あるく ひと	みる ひと	たべる ひと	くる ひと
仮定の「…ば」	のめば	あるけば	みれば	たべれば	くれば
強い命令	のめー	あるけ	みー	たべー	こー
誘い・決意	のも	あるこ	みよ・みよ	たべよ	こよ・こー

表5 形容詞の活用形のアクセント

	よい （よい・えー・いー）	濃い （こい）	長い （ながい）	寒い （さむい）	うれしい （うれしー）
否定	よくない	こくない	ながくない	さむくない	うれしくない
	よーない	こーない	なごない** ながない・ながない	さむない さむない	うれしない
	えーことない	こいことない	ながいことない	さむいことない	うれしーことない
過去	よかった	こかった	ながかった ながかった	さむかった さむかった	うれしかった
「…くなる」	よくなる	こくなる	ながくなる	さむくなる	うれしくなる
	よーなる	こーなる	なごなる** ながなる・ながなる	さむなる・さむなる	うれしなる
「…くて」	よくて	こくて	ながくて	さむくて	うれしくて
	よーて	こーて	なごーて	さむーて	

「なまぬるい」「たよりない」は「なま（なま）」「たより（本来 たより）」の低く始まる性質と「ぬるい（ぬるい）」「ない（ない）」のアクセントの特徴を組みあわせて なまぬるい、たよりない。

「きれいな（きれーな）」「合理的な（ごーりてきな）」「有名な（ゆーめーな）」のように「な」で終わる形容詞（形容動詞）には単純な規則はない。アクセント辞典には「な」を省いた形でのせられているが、それに「な」を低くつける。「に」は直前のアクセントを生かしてつけるので「きれいに（きれーに）」、「合理的に（ごーりてきに）」「有名に（ゆーめーに）」。

形容詞につける選択の意味の「方」は ながい ほう（長い方）、きれーな ほう（きれいな方）など下がり目をなくした言いかたもできる。動詞でも やめた ほう（やめた方）が可能。

形容詞の強意形のアクセント

まさにこのとおりだという気持ちを込めて言うとき、形容詞を低く始めて最後から2音節目だけを高くすることがよくある。たとえば「長い」は普通 ながい だが、これが ながい とか ながーい になる。「きれいな」も きれーな から きれーな になるし、「かわいそうな」も かわいそーな または かわいそーな が かわいそーな になることがある。「すごい」「ものすごい」は普通でも すごい、ものすごい と言うことが今は多いが、これは本来の すごい、ものすごい の強意の言いかたが固定化したものだろう。

6 低く始まって下がり目がないアクセントの独特な性格

低く始まって下がり目がないアクセントには独特の特徴がある。

最初の低い部分は少しずつ上がっていく

このタイプのアクセントは、最初の低い部分は実はまっ平らに低いのではなく、音が少しずつ高くなってゆく。これは長い単語だと特にわかりやすい。たとえば「お好み焼き」と地下鉄駅の「動物園前」のアクセントは簡略化して書くと おこのみやき、どーぶつえんまえ だが、最初から最後のひとつ前にかけてすこしずつ高くしていき、最後でもう一段高く言う。つまり、おこのみやき、どーぶつえんまえ。

その単語の意味を強調して言うときは短い単語でもこの動きがはっきりする。たとえば、謝るときの「ごめん」は詫げる気持ちが強いときは ごめん と言うと大阪らしい言いかたになる。

文の中でのメロディーの変化

例として「蛙」を取り上げる。これだけを言うときは かえる、つまり最後の音節が高い。
㊤：だが、これに助詞の「が」「は」「を」をつけると、かえるが のように高い部分が後ろに移動する。これはこうした助詞を含めた「蛙が」全体に下がり目がないようにするためだ。
㊦：さらにその次に続ける単語のアクセントが高く始まるもの、たとえば「帰る（かえる）」だと、かえるが かえる（蛙が帰る）のように「蛙が」の最後の高い部分がその次の単語に吸収されてしまい、「蛙が」は全体が低くなる。これを助詞を省略して言うと かえる かえる になる。

表6 低く始まって下がり目がないアクセントの文の中でのメロディー変化

かえる(蛙)	
①かえるが(蛙が)	
②かえるが かえる(蛙が帰る)	③かえる かえる(蛙帰る)
④かえるが かえる(蛙が飼える)	⑤かえる かえる(蛙飼える)

⑤：ところが、次に続ける単語のアクセントが低く始まるもの、たとえば「飼える(かえる)」だとそちらの最初の低さは生かさないといけないので、「蛙が」の最後の高さは吸収できない。だから かえるが かえる (蛙が飼える) となる。これを助詞を省略して言うと かえる かえる になる。

以上をまとめたのが表6だが、どの場合でも「蛙」という単語の「低く始まって音の下がり目がない」という特徴は保たれていることに注意してほしい。つまり、文の中での見かけこそ変わるが、アクセントの本質は変わっていないということだ。

7 高く始まって下がり目があるアクセントの文中での特別な規則

「犬」はそれだけ言うと いぬ。これに助詞の「の」をつけた「犬の」は いぬの とも言うが、全体を高く平らにして いぬの とも言う。だから、「犬の散歩」は いぬの さんぽ とも いぬの さんぽ とも言うし、「犬の名前」なら いぬの なまえ とも いぬの なまえ とも言う。ここで「散歩」の「ぽ」を中線の高さで書いているのは、「…の」のように次の単語(散歩)の意味を限定して説明する表現が前にあるときは、次の単語の独自の高さの動きを目立たないように抑えるというイントネーション規則があるためだ。いぬの なまえ も、なまえ をその前と同じ高さで続けることで「名前」独自の高さの動きが目立たないようにしている(もし いぬの なまえ と言うと「名前」が目立ってしまう)。また、「人」は普通 ひと だが、「人の気持ち」は ひとの きもち とも ひとの きもち とも言う。

これは高く始まって下がり目がある身近な単語(固有名詞以外)に助詞「の」をつけるときの規則になる。低く始まる単語には「の」をつけてもこの現象は起きないので、たとえば「卵の黄身」は たまごの きみ だけ。

カタカナ外来語や漢語でも身近な単語なら同じことが起きる。たとえば「ズボンのベルト」は ずぼんの べると とも ずぼんの べると とも言う。だが、地名や人名など固有名詞の場合はこうはならない。たとえば「京橋の駅前」は きよーばしの えきまえ だけ。

助詞「の」をつける場合ではないが、「見たことがない」を本来の みた こと ない ではなく みたこと ない と言う人がいる。また、特定の単語に限るが、「昼から」を本来の ひる から のほかに ひるから とも言うようなこともある。

8 アクセントが高く始まるか低く始まるかによるさまざまな違い

単語の区別

高く始まるか低く始まるかが違うだけで別の単語になる場合がある。

動詞で言えばたとえば「帰る」と「飼える」，「買う」と「飼う」，「着る」と「切る」，「鳴る」と「成る」，「ほる（捨てる）」と「掘る」，「漬ける」と「付ける」，「腫れる」と「晴れる」がある。動詞なのでどれも下がり目はないが，最初の方が高く始まるもので，後の方が低く始まるもの。だから いぬお かう（犬を買う）と いぬお かう（犬を飼う），つちお ほる（土を捨てる）と つちお ほる（土を掘る），つけものお つけました（漬物を漬けました）と つけものお つけました（〔定食などに〕漬物を付けました）では話が違う。

名詞の場合，「寛大」と「関大（関西大学）」，「地震」と「自信」，「診察」と「新札」，「冷害」と「例外」などがあるが，多くはない。やはりどれも下がり目はないが，最初の方が高く始まるもの。だから じしんが あった（地震があった）と じしんが あった（自信があった）では話が違う。

自動詞と他動詞

「生きる（いきる）」は低く始まる自動詞だが，それに対応して「す」で終わる他動詞の「生かす（いかす）」は高く始まるアクセントで言う。自動詞なら何でも低く始まるわけではないが，同じことが「起きる」と「起こす」，「落ちる」と「落とす」，「おりる」と「おろす」，「冷める」と「冷ます」，「過ぎる」と「過ごす」，「垂れる」と「垂らす」，「伸びる」と「伸ばす」，「冷える」と「冷やす」にもある。このようにアクセントは文法を補助する働きも持っているわけだ。ただ，この規則はだんだん崩れかけていて，低く始まる「焦げる」「溶ける」「逃げる」「漏れる」に対応する「焦がす」「溶かす」「逃がす」「漏らす」は中年層以下では低く始まるアクセントが増えている。また，「閉まる」と「閉める」の場合は例外的に前者の自動詞が高く始まり，後者の他動詞が低く始まる。

高く始まるか低く始まるかの個人差

名詞の場合は，高く始まるか低く始まるかで意味が違うものは多くはないことは先ほど言ったとおりだが，個人や世代で違うことはよくある。個人差の例として，「女性」という単語は低く始まる じょせー と言う人も，高く始まる じょせー と言う人もいる。「桜」は さくら が多いが さくら と言う人もいる。

また，「大阪（おーさが）」のように高く始まる単語は，「大阪城（おーさがじょー）」のような複合語にしたときにも高く始まり，低く始まる単語も複合語にすると低く始まるという原則があるが（5.2節参照），単語によってはその例外で言う人がある。「大阪城」も，小中学校時代は毎日横目に見ながら学校に通うという身近な存在だった私自身も含め，おーさがじょー と言う人がある。ただし，私の場合はそうした例外になるのはなぜか「大阪城」だけで，

「大阪市」「大阪駅」「大阪大学」は おーさかし、おーさかえき、おーさかだいがく。

高く始まるアクセントが若い世代で低く始まるアクセントに変わる傾向

やはり名詞の場合だが、高年層では高く始まる単語が、中年層以下では下がり目はそのままにして低く始まる言いかたになることが増えている。たとえば「ヨーグルト」「剃刀」「現実的」は上の世代は よーぐると、かみそり、げんじつてき のように高く始まるアクセントだが、下の世代では よーぐると、かみそり、げんじつてき という低く始まるアクセントが多い（郡 2012a）。「危険」「不足」も きけん、ふそく から きけん、ふそく になっている。また、「鉛筆」「無限大」「優秀」も上の世代のような高く始まる えんぴつ、むげんだい、ゆーしゅー ではなく、低く始まる えんぴつ、むげんだい、ゆーしゅー を若者世代から聞く。地名の「梅田」も うめだ ではなく若者世代では うめだ が増えているし、「心斎橋」も しんさいばし ではなく しんさいばし と言う若者がいる。逆に、「カブラ（蕪）」「見物」「方角」が低く始まる かぶら、けんぶつ、ほーがく から 高く始まる かぶら、けんぶつ、ほーがく になっている単語もあるが、多くはない。

高く始まるアクセントを低く始まるアクセントに変えるのは、ひとつにはエネルギーの節約という面があると思うが、低く始まる方が大阪っぽいように感じられるのでそちらを好む意識が働いている可能性もある。

ニュアンスの違い：気持ちがこもると低く始める言いかた

5.4 節で形容詞の強意形が低く始まるアクセントになることを説明したが、形容詞以外でも本来は高く始まることばを低く始まる言いかたにすることで話し手の強い気持ちをこめることがある。たとえば「ほんま（本当）」は、本当だと主張する気持ちが強いときは ほんま より ほんま が多く、「あかんわ（だめだ）」「しらんやん（知らないよ）」を強い否定の気持ちをこめて言うときは本来の あかんわ、しらんやん ではなく あかんわ（[もちろん]だめだ）、しらんやん（知っているわけがない）と言う。感謝のことばの「おーきに」も本来の おーきに や、それに挨拶のためのリズムをつけたと思われる おーきに ではなく、低く始める おーきに と言うことがよくあるのも、そして「ありがとう」を「ありがたい（ありがたい）」の活用形である本来の ありがとー ではなく ありがとー と言うのも、もとはおそらく話し手の強い気持ちをこめたものだろう。

9 「ん」や「ー」だけが低い、あるいは「ん」や「ー」までが低いアクセント

大阪には「ん」や母音を長く伸ばす「ー」の部分だけが低い、あるいは「ん」や「ー」までが低いアクセントがある。これは東京式のアクセントにはない言いかたなので、大阪のアクセントのひとつの大きな特徴と言ってもよく、またこれが大阪のことばらしい感じをかもしだす。だがこれは大阪のことばを使ってみようとする人が少し苦勞する点のひとつでもある。

たくさんあるが、大阪の若い世代でもこのアクセントで言うことが多い例をいくつかあげると、「ん」については「3月（さんがつ）」「先週（せんしゅう）」「ちゃんと（ちゃんと）」「みんな（みんな）」があり、文の中だと「晩も（ばんも）」「安心だ（あんしんや）」などがある。

「ー」の方は「中華（ちゅうか：料理）」「中学（ちゅうがく）」、文の中だと「きょうは（きょうわ）」「東京も（とーきょうも）」「蚊や（かーや：蚊だ）」などがある。

こまかい話になるが、「金曜日」「土曜日」「法人税」「不純物」のように、「金曜」「土曜」「法人」「不純」という下がり目がないアクセントで最後が「ん」か「ー」になっている単語の後に「日」「税」「物」などといった低くつく短いことばをつけた全体として長めの複合語は、前半の「ー」や「ん」（まで）が高いアクセント、つまりきんよーび、どよーび、ほーじんぜー、ふじゅんぶつ が伝統的だった（5.1節の複合語の項参照）。今はそれが古めの言いかたになり、中年層以下ではかわりに きんよーび、どよーび、ほーじんぜー、ふじゅんぶつ という「ん」や「ー」の前で下げる言いかたが多くなっている。

「金曜日」や「法人税」では「ー」「ん」までが高いかどうかの違いは聞いてもなかなかわかりにくいので気になりにくいだが、これは「ー」「ん」の後に下がり目があっても構わないという伝統的で大阪らしいアクセントが衰退しかけていることを意味するものだと思う。

また、これもこまかい話だが、人名の「山田さん」「自然な」「きちんと」、そして「心臓」「女子校」「無効な」のように「ん」「ー」だけが低い単語は、きちんとした発音をしないとときにアクセントが崩れがちだ。丁寧に発音するときは「山田さん」「自然な」「きちんと」は やまださん、しぜんな、きちんとだが、気を抜いて軽く言うと やまださん、しぜんな、きちんと のように「ん」がその直前の音節と一体化した形で高くなりやすい。また、「心臓」「女子校」「無効な」も しんぞー、じょしこー、むこーな が しんぞー、じょしこー、むこーな になりがちだ。「きれいな」の強調形 きれーな も きれーな になりうる。ただし、単語が低く始まるという特徴は崩してはいけないので「3月（さんがつ）」はそのまま。

10 アクセントで意味、ニュアンス、印象が変わることがある

アクセントが違くと別の単語になる例

アクセントが違くと別の単語になる例はたくさんある。4節では「雨（あめ）」と「飴（あめ）」、「橋（はし）」と「箸（はし）」と「端（はし）」、8節では「帰る（かえる）」と「飼える（かえる）」、「着る（きる）」と「切る（きる）」、「地震（じしん）」と「自信（じしん）」、「診察（しんさつ）」と「新札（しんさつ）」などの例を見た。

命令する気持ちの強弱

一段活用をする動詞の「着る」「見る」「寝る」「やめる」を強い命令の形で言うときは きー、みー、ねー、やめー というアクセントだが、ソフトな命令（「…なさい」に相当）として言うときは きー、みー、ねー、やめー になる。

「…して、（そして）見る」と「（試しに）…してみる」の違い

「映画を映画館に行って見る」を「映画を」を省略して言うと えーがかんに ひって みる だが、様子を探るために「映画館に行ってみる」なら えーがかんに ひってみる とアクセントが変わる。これは動詞に「…て」をつけた形のアクセントに2とおりがあって、それを文法的な働きによって使い分けるためだ（表4参照）。

気持ちがこもると低く始める言いかた

形容詞の強意形が低く始まるアクセントになることは5.4節で、そして形容詞以外にも同様の現象があることは8節で説明した。

アクセントの情緒性

同じ単語でも、アクセントが違うとそこから感じる気持ちや物の印象が変わることがある。きわめて個人的なエピソードになるが、具体例をふたつ紹介したい。

ひとつは大阪名物「お好み焼き」の話で、大阪のアクセントは おこのみやき だが、私はこのアクセントで言ってもらうことではじめてあの匂いと味が思い浮かぶ。空腹時ならよだれのひとつも出ようかというものだ。しかし、東京式の おこのみやき だとそういう気持ちは生まれない。

もうひとつの例は、今は学研都市線ともつばらと呼ばれる JR 片町線にある難読駅で有名な「放出」^{はなてん}の話だ。これは中学時代までの私の最寄り駅で、アクセントは当時の はなてん が身に染みついている。現在は中年層以下のアクセントが はなてん になり、電車内のアナウンスもこれだ。アクセントが変わっていることを知らないころの話だが、久しぶりに訪れたときに新しいアクセントでのアナウンスを聞いて、自分が降りるべき駅がここでよいのか一瞬よくわからずうろたえ、降りそこないかけたことがあった。

今の例は、自分の名前が思わぬふう読み間違われて、自分のことを言われているのか確信が持てないという現象に似ている。地名の「鶴橋」「高槻」も「放出」と同じ時期に同じような形でアクセントが変わったので、これに似た感想を持つ地元の高年層はいるだろう。自分自身の名前もそうだが、身近な地名は自分のアイデンティティに結びついているから、アクセントの違いも大いに気になるわけだ。だが、地元出身者でなければ特に気にならない。

このほか、「あんた（あなた）」と「うち（私：女性語）」ということばは、アクセントしだいでそれを使う人が上品かどうかという印象が変わるという話がある。それによれば あんた は親しみの意を含んではいるが、あまり品のよいものではない。だが、あんた はさらに品が悪く、かつては大阪の「中心部では全く使わず、周囲部にかぎられていた」（牧村史陽 1984, 初版にあたる 1955 年版にはこの記述なし）。私自身もこの気持ちはわからないでもないが、現在の大阪人の多くには共有されていないようで、依然2通りのアクセントは聞くものの、中年層には品が悪いとされる方の あんた が多いようだ。「うち」のアクセントには うち と うち があるが、後者は「品がわるくなる」（同、やはり 1955 年版にはこの記述なし）。

11 アクセントの世代差、個人差、地域差

11.1 世代差

大阪のアクセントも時代とともに少しずつ変わっている。同じアクセントを持つ語群が一斉に変わるという体系的な変化もあるが、個別の単語の東京アクセントへの接近も増えている。

2音節の「雨」「秋」「朝」などの変化

たとえば「雨」で言えば、おおまかに言って1950年代の後半あたりまでの生まれの人なら「め」の部分は一度高く言ってからすぐ下げる形で言う。だから あめ_二、つまり め_二 をすばやく軽く あ に続ける感じになる。だが、それ以降の世代は単に「め」が高いだけの発音になった。

同じ変化をした単語に「赤」「秋」「朝」「汗」「影」「亀」「黒」「声」「午後」「鮭」「地図」「蕎麦」「鍋」「ネギ」「春」「豚」「前」「豆」「窓」がある。そして「蜘蛛」「蛇」「ブヨ」など不快な感じがする単語や、「あほ」「けち」「すか（あてはずれ、はずれくじ）」「ちび」「はげ」「びり」「ぶす」「ぼけ」のように否定的な意味合いを持つ一連の単語もこの仲間だ。変化した時期は地域によって遅いところもあるし、同じ地域でも個人によっても違うが、京阪式アクセントの地域では同じことが起こった。

「あほ」「けち」などは、ののしりのことばとして間投詞のように使う場合は、今の中年層以下も あほ_二、けち_二 のように最後を長くしてその中で音を下げる言いかたになりがちだ。

2音節の「船」「海」「空」などの変化

5.1 節の2音節の名詞のところすでに説明したが、おおまかに言って1960年代前半までの生まれの人は「船」を低く始まって下がり目がないアクセントで言った。だから文の中では ふねに のる（船に乗る）、ふねが 出る（船が出る）だった。ところが、それ以降の世代はそれを ふねに のる、ふねが 出る というようになってきた。これは、低く始まって最後に下がり目があるアクセントに変わったということだ。ただ、単語だけを言うときのメロディーが「ふ」が低く「ね」が高いという点は変わっていない。

同じ変化をした単語に「穴」「息」「板」「糸」「海」「傘」「数」「皮」「肩」「缶^{くだ}」「管^{くだ}」「粉^{こな}」「汁」「題」「空」「種」「玉」「杖」「喉」「倍」「箸」「肌」「針」「屋根」、そして「お」をつける「お茶」「お湯」などがある。数は多くないが身近な単語が多い。結構大きな変化なのだが、今の中年層でも親世代との間にこんな違いがあることに気がついている人は少ない。

京阪式アクセントの地域ではどこでも同じことが起こった。他の地域には変化が遅いところもあるし、同じ地域でも個人によって違った。伝統的な言いかたをまだ残す若者も場所によっては少しいるようだ（私が直接知っているのは淡路島の人）。

大阪ではこの変化は一応終わっている。とは言っても完全に下がり目があるアクセントにな

ったかと言うとそうでもなく、1980年代の後半の生まれで ふねに のる、ふねが てる と言う人でも、たとえば「船の色」は新しいアクセントなら期待される ふねの いろ ではなく、古いアクセントで ふねの いろ と言う人がある（郡 2012）。また、「船から」も ふねから が期待されるところを、古いアクセントで ふね から と言う人がある。

「頭」「鏡」「休み」など伝統的に最初の2音節が高いアクセントの変化

5.1 節の3音節名詞のところで説明したように、「頭」には今はほとんど聞かれないが あたま というアクセントがあった。それが今は あたま か、人によっては あたま に変わった。

「鏡」も同じように古い かがみ が かがみ か かがみ に変わった。「休み」の場合は今も古い やすみ がまだ聞かれるので、新しい やすみ、やすみ も入れて全体として3種類のアクセントがある。

高く始まるアクセントが低く始まるアクセントになる傾向

これについては8節で「ヨーグルト」などの例を使って説明した。

2つの単語を合体させた複合語で境目の前の「ん」「一」までが高いことがなくなる傾向

これは9節で「金曜日」「土曜日」「法人税」などの例で説明した。

地名のアクセントの変化

大阪市内の有名な地名である「梅田」には うめだ と うめだ、「鶴橋」には つるはし と つるはし の2通りのアクセントがある。どちらもふたつめが新しいが、「梅田」は今の若者世代からもまだ うめだ が聞かれるのに対し、「鶴橋」を つるはし と言うのは高年層に大きくかたよる。

「梅田」を自分で うめだ と言う人は うめだ という発音に違和感を持つ。そして つるはし と つるはし の場合は聞いた感じの違いが大きいためだろうが、たがいを変だと思う。

略語のアクセントの変化

大学生が使う略語の「卒論」「就活」は そつろん、しゅーかつ から そつろん、しゅーか つ に平成の時代に主流が変わった。特定の集団でしか普通使わない単語のアクセントの変化は速いのだろう。「卒論」のアクセントは私の周辺では2年間で入れかわった。ただ、古い方の言いかたをする学生は令和になった2020年代前半の時点でもいなくはなかった。

東京アクセントの取り入れ

今の大阪のアクセントのひとつの傾向として見逃せないのが、名詞について東京の言いかたを大阪風にアレンジして取り入れるケースが増えていることだ。大阪風のアレンジとは、下がり目は東京と同じにして、それを高くまたは低く始まる形で言うということだ。

今の高年層でもすでに東京式を取り入れている人が少なくない例として、果物の「オレンジ」を古い オレンジ ではなく オレンジ、「工場」を こーじょー ではなく こーじょー、接続詞の「しかも」を しかも ではなく しかも、「びっくり」を びっくり ではなく びっくり、「皆さん」を みなさん ではなく みなさん、「もともと」を もともと ではなく もともと と言うなどがある。

最近の例では、たとえば「メンバー」を めんばー ではなく めんばー と言うような、今の東京を中心に使われている下がり目のないアクセントを取り入れる人も少なくない。

東京式のアクセントを取り入れるものの仲間には別のタイプのものもある。それは「いよいよ」がかつて多かった いよいよ から いよいよ に、そして「有機化合物」が ゆーきかごーぶつ から ゆーきかごーぶつ あるいは ゆーきかごーぶつ になったような例だ。かつてはひとつの単語の中に高さの山がふたつ以上あることは問題なく許されたのだが、その伝統的な大阪らしさが薄れたということだ。

「雲」と「蜘蛛」

この2つの単語のアクセントは混乱している。伝統的には「雲」が くも で、「蜘蛛」が くも だ。しかし、今の中年層では「雲」を くも と言うことが多いので「蜘蛛」との区別がわからなくなった。ところが、新しく「雲」を伝統形と同じだが実際には東京式の取りいれではないかと思われる くも と言う人が、そして「蜘蛛」にも東京式の取りいれではないかと思われる くも と言う人が出てきた。その結果、「雲」にも「蜘蛛」にも2つのアクセントが今は聞かれるので、自分がふだんどう言っているのかもわからなくなっている人がいる。

11.2 個人差

今見たような世代差は、あらわれかたが人によって早い遅いがある。だから同じ世代でも旧形を使う人と新形を使う人が混在している。はっきりした世代差でなくても2つ以上の言いかが同じ世代に存在する単語には「会議」(かいぎ, かいぎ, かいぎ)、「授業」(じゅぎょー, じゅぎょー, じゅぎょー)、「おみくじ」(おみくじ, おみくじ, おみくじ)、「電車」(でんしゃ, でんしゃ) などかなりの数のものがある。おおまかな言いかたになるが、同世代のふたりでも10語にふたつ程度はアクセントが違うことがある⁷⁾。

7) 杉藤美代子氏の『大阪・東京アクセント音声辞典』にアクセントが記された約6万6千語のうち、1916-1932年生まれの名と1962-1964年生まれの名のデータ(出版前の整理中のもの)がそろっている約5万4千語のうち、6名全員のアクセントが世代を越えて一致しているものは約46%だった(郡・杉藤1989)。各世代の名が一致している単語は1962-1964年生まれで約70%, 1962-1964年生まれで約64%, そして各世代3名のうち2名が一致する割合は73-81%だった。つまり同世代のふたりをとあげると10語に2語かそれ以上は違っていたことになる。

11.3 地域差

同じ京阪式アクセントでも地域によって個別の単語や表現のアクセントが違うことはときどきある。地域差がはっきりしているもののひとつに挨拶の「さよーなら」がある。大阪府の摂津・河内地域は さよーなら、京都府南部と奈良県北部は さよなら または さよーなら だが、兵庫県の東南部と大阪府の和泉地域、和歌山県の北部では さよーなら という(郡 2025)。

また、大阪(摂津・河内)と京都市内でアクセントが違う言いかたが結構ある。まず、丁寧の「…ます」の過去形「…ました」のアクセントが違う。「行きました」「飲みました」を大阪では いきました、のみました と言うが、京都では いきました、のみました と言う。軽い敬意をあらわす「…はる」の過去形「…はった」も、「行く」「飲む」に対しては大阪では いきはった、のみはった と言うことが多いが、京都では いかはった、のまはった。

このほか、「東京」という単語のアクセントは、大阪ではほぼ とーきょー だが、京都ではもっぱら とーきょー と言う。しかし、「大阪」「京都」はどちらでも おーさか、きょーと。また、動物の「ライオン」は大阪では らいおん または東京風を取り入れたと思われる らいおん だが、京都では らいおん と言うようだ。「曜日」の名前のうち月・水・木・金にも高く始まるか低く始まるかの違いがある。たとえば「金曜日」は大阪の主流は きんよーび または きんよーび だが、京都では きんよーび または きんよーび と言う。

神戸は大阪とほぼ同じだが、大阪の泉南地域には注 6 に書いたようなものなど古風なアクセントが残っていることがある。

引用文献

- 郡史郎(2004)「東京っぽい発音と大阪っぽい発音の音声的特徴」『音声研究』8(3), 41-56.
- 郡史郎(2011)「大阪市方言若年層の二拍名詞 4 類 5 類のアクセントについての一考察—特に文中でのふるまいに注目して—」『音声文法』くろしお出版, 231-252.
- 郡史郎(2012a)「京阪式アクセントの特性と動向」『音声研究』16(3), 28-33.
- 郡史郎(2012b)「現代大阪市方言における低起式アクセントの特徴」『音声研究』16(3), 59-78.
- 郡史郎(2016)「長い複合名詞のアクセント—「携帯電話電源オフ車両」などの説明原理についての覚え書き—」『音声言語 VII』(近畿音声言語研究会), 31-48.
- 郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.
- 郡史郎(2025)「幼稚園等での挨拶『先生さようなら、みなさんさようなら』のメロディーとその地域差—近畿の京阪式アクセント圏内の分布と現代の全国的画一化傾向—」『音声言語の研究 19』(大阪大学), 1-18.
- 郡史郎・杉藤美代子(1989)「大阪アクセントの世代差」『音声言語 III』(近畿音声言語研究会), 167-197.
- 杉藤美代子(1996)『大阪・東京 アクセント音声辞典 CD-ROM』丸善.
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 牧村史陽(1984)『大阪ことば事典』講談社(単行本は 1979, 最初の版は『大阪方言事典』杉本書店, 1955).